

# 創作舞踊を通しての教育

飯 田 正 江

## はじめに

「舞踊は人間の最古の芸術である」とは、マックス・フォン・ベーム (Max von Böhm) やエドワード・スコット (Edward Scott) 等の舞踊学者の説である。舞踊の発生は、地球上に人間が住むようになった時にはじまったとも言われる。

舞踊が最初に教育の中にとりあげられたのは、古代ギリシャ時代であった。古代ギリシャでは、「健全なる精神は健全なる身体にやどる」(後にローマ人が書き残した格言) という、心身一元論の思想があり、舞踊の教育的価値を強調していた。身体的にも、精神的にも健全な人間をつくるための教育方法として舞踊が尊重されていたのである。

しかし、中世になってヨーロッパでは、キリスト教神学が進むにつれ、心身二元論の思想が発達し、人間の霊肉は分化し、肉体の価値を認めなくなり、舞踊を排斥圧迫するようにまでなった。聖アウグスチヌスは「舞踊の輪の中心点には悪魔がいる。その悪魔をとりまいて踊りまわるのだ」といって、攻撃し、舞踊禁止令を出した。しかし舞踊は表面では消えた様にみえても、かえって当時の政治的な理由から、かくれても「踊る」ようになった。もはやその踊りは、人間の精神生活とは離れ、肉体の律動感がもたらす享樂的な一面のみとなってしまったのである。

舞踊が再び教育の中にとり入れられたのは20世紀になってからである。19世紀の中葉、ヨーロッパには遠くはルネッサンスの影響を受け、新しいヒューマニズムが起り、「心身一元論」が肯定され、近代舞踊革命が起った。ルドルフ・ラバン (Rudolf Laban 1879-1958) は現代舞踊(創作舞踊)の父といわれ、舞踊が空間芸術であることを発見した。そしてロッテ・ヴェルニッケやマックス・テルピス等により、創作舞踊の方法論が樹立された。メリー・ヴィグマン (Meary Wigman 1887-1973) は「舞踊は人間の身体の運動を通して魂を表現する芸術である。すなわち、舞踊美は、あくまで形而上学的美でなければならない」と述べ、ラバンの理論や法則を芸術作品にして舞台の上から証明した舞踊家である。

1947年、我が国の文部省は「学校体育指導要綱」を出し「ダンス」が、明治以来伝承されてきた既成作品による教育から児童中心の教育への大転換をしている。その後指導要領は何度か手を加えられ、1968年に出された「小学校学習指導要領」におけるダンス(表現)は題材、運動形式、鑑賞、伴奏と総合した形で提案された。しかし、指導に独自の創意工夫を必要とする創作舞踊は敬遠され、現在でも一部の学校がとり入れているにすぎないのである。

我が校では1967年（本州女子短大として創立）以来「音楽リズムⅡ」の教科の中に創作舞踊を取り入れてきた。その授業中創作された作品のいくつかを、1973年より、「音楽と創作舞踊の会」（上田市民会館於）で発表をしてきた。それは1980年まで8回行われた。1981年からは「上田女子短期大学 CREATIVE DANCE」と名称し、舞踊だけの発表会をするようになり、今年で3回を終了した。ちょうど11回、毎年発表してきたことになる。そこで、ここでは創作舞踊教育の指導過程を分析し、さらには11年間の発表の歴史を通してその教育効果を再認し、今後の指導のあり方を考察する。本来音楽リズムⅡの目標は学生の人間形成と幼児教育者の育成をめざしているが、今回は前者のみをとりあげる。

## I 創作舞踊教育の指導過程

### イ 理念（1年）（講義1時間）

われわれ人間は、思想、感情、感覚を人に表現する方法として、文学、音楽、絵画、舞踊等を用いる。舞踊はその中のひとつであり、身体の運動を通して空間運動で表現することである。

「舞踊することは人間の本能である」（ヘルム・ヴントやマックス・フォン・ベーム等の言葉）とよくいわれる。この説は我々が生きているということは、心臓が規則正しくリズムを打ち、うれしい時には踊り上り、悲しい時には地にひれ伏す様に自然に身体が動く。その運動をくり返す時に、そこにリズムの形体が生まれる。人間の感情が身体的条件と機能に舞踊を開始させるといものである。

舞踊は、おなじ芸術でも、絵画、彫刻、建築、音楽とは根本的にちがう特性をもっている。絵画、彫刻、建築は、物質（紙、えの具、粘土、木材等）を、また音楽は声や楽器をメディアとしている。ところが舞踊は表現メディアが人間自身である。すなわち、表現メディアと舞踊を創作するものが同じ人間であるということである。それは舞踊の発生時から現代まで「人間が踊る」という点では何の変化もなく続いている。しかし、このような舞踊の特性は、かえって舞踊の本質をより明白にし「舞踊はもっとも人間的な芸術である」ともいえる。

さてこの様な舞踊を通しての具体的目標は

- |                      |                    |
|----------------------|--------------------|
| ① 健康で運動的で表現的な身体をつくる。 | ⑤ 豊かな表現力を養う。       |
| ② リズム感を発達させる。        | ⑥ 高い情操を養う。         |
| ③ 空間形成能力を養う。         | ⑦ 創造的な人間にする。       |
| ④ 即興能力をたかめる。         | ⑧ 審美的な生活ができる人間にする。 |

である。ここでは舞踊作品そのものの成果よりも、教育効果からみると、舞踊を創作する過程で人間形成をめざしている。

### ロ 基本科目Ⅰ（実技11時間）

#### ① 空間形成法

これは、運動によって、空間を形成するのに必要な技術を練習するものである。運動で空間

を形成するには、正確な空間運動ができなければならない。そのための練習をし、それをおして、運動による空間の認知や空間を把握する能力が育てられる。ここでは、

- ・直線上の移動（前後に歩く）
- ・曲線上の移動（前後に歩く）
- ・直線上と曲線上の移動 をとりあげる。

## ② 身体育成法

これは、運動訓練により、美しく調和のとれた身体をつくり、舞踊をイメージ通りに踊れる豊富な運動感をつけ、さらに表現力をつけることが目的である。この育成法は、第1課程11項目と第2課程9項目があるが、本学は、第1課程をとりあげ、1項目から10項目の中の中心的な運動を行っている。第1課程は個運動を中心に身体運動と空間、力の関係など基本的なことがとりあげられているので、一通りの訓練ができる。

## ③ 即興

即興とは、ある刺激に対して、複雑な思考過程を通らずに、素早く反応することで、直感的に物を感じ、直感的に身体運動で表現することである。即興ができない理由は、99%「はずかしい」という感情のためで、そのはずかしさを除去しながら、運動のイメージを豊かにし、育てていく8段階の教育法がある。

本学学生の場合は、8段階を全部行わなくても、目標に到達できる。そこで、我が校ではそれらもとりのれ次の通り行う。

### (1) 指導者の模倣

#### (2) フォルムをつくる。

ア 歩いて（スキップ、走って）止り、フォルムをつくる。

イ 題を与えてフォルムをつくる。

ウ イを発展させる。（フォルムのまま、8拍移動）

### (3) 二人で向い合って即興

イ 片方がリーダーになり、その模倣。

ロ 題を与えての即興（花とちょう、キャッチボール等）

### (4) 創造即興

## ハ 基本科目Ⅱ（実技17時間）

### ①動きのスケッチ

動きのスケッチとは、いろいろの現象や観念を運動で描写することである。絵の場合のスケッチは、見たものをその通り描くのではなく、自分の印象が強いところを描き、見えても描かない部分もあったり、現実にはそこにはないものをプラスして、最も描きたいものを強調する。舞踊の場合のスケッチも同じで、題の現実の運動のある部分を取り出したり、その部分を誇張したり、余分な運動は切りすてたり、さらに必要に応じて、現実にはない運動をつけ加えたりする。

### 題材

- (1) 波（7人） （2時間）
- (2) 色（赤と黒、金等 題は自由・7人）（2時間）
- (3) 動物（下記より一題指定 1人）（発表のみ1時間）  
ねこ・さる・象・にわとり・かえる・カマキリ・へび・つばめ
- (4) 人間（1人 上記と同じ）  
赤ちゃん・幼児・中学生・大学生・30歳の婦人・老人
- (5) 特定な人物（1人）  
身近な人のスケッチ
- (6) 物体（1人）  
自転車・オートバイ・トラック・エレベーター・ブランコ・飛行機
- (7) 静的なもの（1人）  
椅子・ピアノ・体育館・富士山・独鈷山・東京タワー
- (8) 感覚・感情的なもの（1人）  
暑さ・寒さ・暗さ・冷たさ・うれしさ・悲しさ・怒り
- (9) 思想的なもの（5人） （3時間）  
神・平和・進歩の中から選択

以上、ひとりの場合は、創作は宿題とし、授業中は発表のみとなる。

スケッチを観賞しながら、フレーズ・シンメトリー・コントラスト・リズムについては適宜指導していく。同じ動きを二度くり返しをさせることにより、リズムに注意し、フレーズ感を育てる。

## ② ソロ作品 （3時間）

テーマは自由

## ③ 校内発表会・CREATIVE DANCEの観賞（レポート提出）

以上が一年時の基本科目である。まとめとして、授業の記録ノートと一年間の感想、反省を書き提出させる。来年度の舞踊創作のグループと、テーマをほぼ決めてくることを指示しておく。

## 二 創作 （2年） （12時間）

### ① グループをつくる。（1人～10人）

人数構成は自由

### ② 主題を決定する。（①と②で1時間）

テーマから内容を決めてもいいし、その反対に内容を決定してテーマを決めてもよい。どちらかが決定したら教師に報告をする。なかなか決定しないグループは、教師の助言を受ける。テーマが決定したら、文献・辞典等を調べ、できるだけ資料集めをする。そして、何を表現したいかを、グループ内でしっかりと話し合う。

### ③ モティフをつくる。（1時間）

主題が決定すると、まず、頭の中で動きのイメージをつくる。そしてそれを次には現実

の運動にする。

本学の場合は、テーマにより、ひとりひとりがモチーフを考えてきて、それをグループ内で観賞し、その中から、いいモチーフを選ぶように指導をする。

④ モチーフの発展（作品としてのまとめ）（5時間）

舞踊はモチーフをもとに作品を形成する。技術的には、モチーフの展開ということで、それは新しい空間形成をつくっていくことである。つまり作品としてのまとまりをもつのである。本学学生は4分の3が舞踊創作は初めての学生であるので、この段階がむずかしい。そこで、一応基本形式を説明し、その方向で作品をまとめる様に指導をする。もちろん、この形式を越えて、新しい形式を生み出してもよい。

基本形式 4単位

- A モチーフをつくり、フレーズにする。
- B Aの発展（Aの動きのリズムや空間を変化させ、Aをさらに印象づける。）
- C A, Bのコントラストをつくる。
- D A, Bの印象にもどる。終止として主題が表現できるよう工夫する。

⑤ 音をつくる。（3時間）

音は、既成のものではなく、舞踊の表現をより効果的にする新しいものをつくる。まず、舞踊の動きを、グループの独自の方法で記録する。色々な音を集音し、その中から、テーマに合う音を選ぶ。それを増幅したり速度を変えたり、合成したりして、動きに合う様につくり、録音する。

⑥ 演出 （2時間）

- (1)音と動きを合わせて何度も練習をする。
- (2)テーマに合う衣裳をデザインし制作する。（衣裳は着けなくてもよい。）
- (3)照明 配光案を考える。

ホ 校内発表会 （1983年 33作品 3時間）

1, 2年観賞

全作品を発表、ほとんどのグループが簡単ではあるが衣裳をつけていた。照明は各クラス内で分担して行った。クラス単位で授業を進めており、他のグループの作品を何度も見ていたり、出演者と連絡もとりのやすいので、この方法は適切であった。

プログラムは、美術部の学生に制作させ、色画用紙に印刷した。

ビデオテープに録画。

へ CREATIVE DANCE まで （1983年 5時間）

校内発表会終了後、1, 2年生全員にレポートを提出させる。内容は、①良かった作品を3つあげる。②感想である。CREATIVE DANCE出演グループは①を集計し、順位を決め、その結果と、プログラム構成上の事を考慮し、教師が決定する。

CREATIVE DANCE まで、出演グループはさらに作品を練り、出演しないグループは、グループ単位で仕事を分担する。

創作舞踊を通しての教育

① 出演グループ (12作品, 83人)

教師は各グループの作品をもう一度観て、さらに質の高い作品になる様アドバイスを与える。発表会当日までに各グループが作品を修正した箇所は次の通りである。

ア 内容について 25%

主題を明確につかむ。構成のC単位についての見当。

イ 動きについて 75%

はっきりしたリズムパターンにする。長すぎるものをカットする。

ウ 音について 58%

全部作り直したグループが1グループ

部分的に作り直したり、音をつけ加えたグループが6グループ

エ 衣裳について 83%

新たに制作したグループ 10グループ

オ 舞踊技術について 100%

発表会当日までに100回踊ることを目標にした。

カ 照明プランについて

発表会場の照明器具について知り、照明プランをたてる。

② 発表会運営 (出演しないグループ 113人)

各グループがそれぞれの役を分担し、仕事の計画、実行、反省までを行う。

ポスター、チラシ、チケット、招待状は時間のつごうで指導者が作成をする。

ア 係

総務・受付・アンケート・舞台・楽屋・車庫・会場・衣裳・チケット販売・接待・ビデオ・照明・連絡・賛助出演校

③ 発表会前日 (会場)

テクニカルリハーサル

④ 発表会当日

ドレスリハーサル

発表

⑤ 反省

レポート提出、内容、①良かった作品を3つあげる。㊦①の感想、㊦全体についての感想。

㊦分担した仕事の反省。

※ 学生は授業時間以外にも、始業前・空時間・放課後・休日等を使い、グループ毎に積極的に、創作舞踊に取り組んだ。

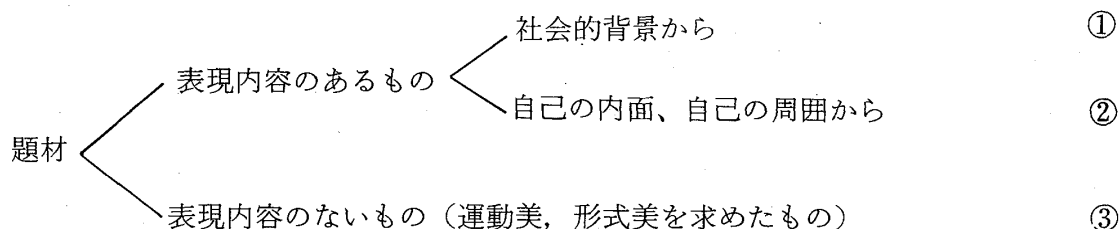
## II 創作舞踊11年の変化の分析

### イ テーマ

題材の範囲は、人間の感情、感覚、思想、自然、社会的事象、具象的なもの、抽象的なものと広範囲である。ここでは、学生がどんなところからテーマを選んだかを知るために次の通り、大きく分類をする。



「西暦2000年X国」 1983年



11年間の作品数は323作品で学生がテーマから何を主題にしたか内容を書き提出したものを分類すると、主なものは下記の通りである。

#### ① 社会的背景から 20%

1973—食品公害	(1973)
海底	(1973)
灰色の世界	(1973)
黒い海	(1974)
海	(1974)
不快指数	(1975)
くっせつ	(1975)
騒音	(1976)

「公害」が大きな社会問題となる。

BRACK PEACE □短調	(1973)
の一・もあ	(1974)
ベトナムの民衆	(1975)
戦いは終わっていない	(1975)
空腹	(1975)
ひろしま	(1976)
飢え	(1980)
侵略	(1983)
戦争と平和	(1983)

「ベトナム戦争、インド  
シナ戦争、核実験、中東  
戦争」等

## 創作舞踊を通しての教育

小さな手	(1973)	コインロッカーに幼児の 死体が捨てられる
コインロッカーのなぞ	(1974)	
"眠りたいの"	(1976)	植物人間の安楽死の問題
廃物利用	(1976)	資源の再利用が叫ばれた
宇宙	(1976)	宇宙開発
四次元への回想	(1977)	
スペースファンタジー	(1978)	
宇宙からのメッセージ	(1979)	
スペースインベーダー	(1979)	
CMの及ぼす影響	(1977)	CMについての社会的問題が起る
オカルト	(1977)	オカルトブーム
呪術	(1979)	
自動販売機	(1980)	何でも自動販売機で売られることが問題となる
コピー	(1980)	コピー全盛時代、コピー公害
北京旅情	(1981)	中国ブーム シルクロード (NHK テレビ)
中国	(1981)	
万里の長城	(1981)	
アラビアンナイト	(1981)	
異邦人	(1981)	

### ② 自己の内面, 自己の周囲から 50%

例えば

イ Twenty, 二つの心, 20歳前, 青春, たびだち, 自由, 岐路, 女と鏡, めざめ, 時, 人間模様, 未来 etc.

ロ かげろう, 火山, 原生林, 太陽, 雨だれ, 砂漠, マグマ, 蟻地獄, 蜘蛛, 紫陽花, サルビア etc. (自然や動物)

ハ 大名行列, 防人, クレオパトラ, 卑弥呼, 古代文明, 縄文土器 etc. (歴史から)

ニ 千手観音, 阿修羅, 鐘楼, 輪廻 (宗教から)

### ③ 運動美, 形式美 30%

あやつり人形 (毎年), 万華鏡 (6回), おもちゃ箱, 人形の世界, しみ, ガム, ガラス, ポップコーン, バイブレーション, ペパーミント, サスペンス, カーニバル, エンゼルフィッシュ, エスケープ, サーカスを見る人, ハート, heart, etc.

どの年にもあるが, 1981年より特に多くなった。

### ロ 動きについて

#### ①1973年～1976年

イからもわかるように, 初期は「公害」に関するテーマが多く, その動きは「ドロドロした



感じ」で舞台をはうような、又、腕や体を波動して使う様な動きが多い。従って全体に暗く重い感じがする。

②1978年～

「宇宙」に関するテーマが多くなってくると「空間の広がり」が出てきた。動きは、上下肢の角度をはっきりつけて曲げたり、直線的な運動が多くなる。

③1981年からはイの③が多くなり内容のある作品よりも、運動美や形式美を追求したものが多い。従って、リズムがはっきりわかりやすく、又舞台全体がすっきりとした印象となる。

上記①～③のテーマからくる動きの変化と、もう一方には技術という問題がある。学生の踊る技術は、11年前と比べるとはるかに進歩している。特に1981年より、100回練習を目標にしてからはめざましいものがある。何度も練習を重ねることにより、作品の内面まで表現できるようになってきている。

ハ 音について

①初期は、打楽器、ピアノ、自然の音(水、声、おもちゃ etc.)が中心で音に流れがない。録音は、マイクロフォンでするので、外部の音が入りやすく、美しくとれない。

②1977年、シンセサイザー、オープンデッキを購入した。翌年からシンセサイザーにより、色々な音を作れる様になり、作品に合った音ができる。録音は、シンセサイザーから直接コードでできるので雑音のない美しい音がとれる。その上この年から、ステレオ録音をする。しかし、これらの器具の使用は技術的には、かなり困難であった。

③1981年、1983年にカシオトーンを購入。

1982年、プレイヤーを購入。これにより、簡単に音作りができるようになった。効果音のレコードを上手に使い、シンセサイザー、カシオトーンの音を組み合わせ、深みのある美しい音を作れる。

上記①～③にみるように、この11年間の音の進歩はめざましいものがあった。その一因は、②と③の通りシンセサイザー、オープンデッキ、カシオトーン等の器具の購入による。又、このような電子音が、ラジオやテレビから流れ、私達の生活の中に完全に入り、学生もその影響をかなり受けている。特に、IIのイ、①のテーマの中にある様に、NHKテレビの「シルクロード」のテーマ音楽は有名である。

各家庭に、カセットテープレコーダーが普及し、学生のほぼ全員が録音の経験ありと答えている。11年前は、録音技術から指導したが、今は全くその必要がない。

ニ 衣裳について

①1973年～1977年

簡単なデザインのものが多い。

布は裏地を使用

②1978年～1980年

デザインに工夫がみられ、制作にも時間をかけ、体に合ったものができる。布は伸縮できるものを使用、又レオタードを購入する。特に、1979年の「細胞」は、グレーのレオ

タードの上に透明な、ナイロンを着た。学生は電気ゴテでナイロンの上着を作った。これが舞台では、照明が反射して時々光ったり、カサカサと音をたて、細胞の感じが良く出ていた。

③1981年～1983年

作品それぞれにデザインの工夫がみられる。制作も衣裳係が手伝うので、かなり高度な洋裁技術ができる。個人の体型に合った衣裳ができる。布も伸縮がありラメ入りの物等が手に入りやすくなった。1983年「蜘蛛の巣」、上下黒い衣裳の上に白いヒモで網を編み、それをかぶった。



「蜘蛛の巣」 1983年

ホ 照明について

1978年にスポットライト4基を、1979年に調光器を購入した。これにより、校内発表会でも照明ができるようになった。

1981年から、舞台の Horizont に、雲の流れ、炎、等色々工夫がなされるようになる。

以上の様に11年間を大別すると三段階に区分でき、飛躍してきたのがわかる。

### III 創作舞踊と教育

#### 学生の一年時のレポートから

作品に対しては、「すばらしかった、よかった」が93%である。「本当に舞台上で踊ったのは、本学の二年生なのだろうか」という驚き、「私達も、二年生になるとあのような舞踊が創れるのだろうか」という不安、そして、「来年は、あの舞台上で踊りたい」という内容がほとんどである。

#### 学生の二年時のレポートから

出演者によると、「感動した」44%、「楽しかった」37%、「充実した日々だった」59%、「何かを得た」38%、「いい思い出ができた」45%とほぼ全員が満足したとある。創作過程では、「創作はむずかしく、苦しかった」54%、特に動きと音作りが苦しかったようである。又この中には、「人間関係」を78%があげている。舞台での発表後、「あっという間で短く感じられた。これで終わりかと思うと淋しい気持ちがする」73%、「一年生からの夢がかなった」30%、「内面まで表現できた」20%、「もっとやればよかった」30%である。そして、「皆の協力で舞台が作られ成功した」96%、「観客が多くてよかった」45%と周囲に目を向け感謝の気持ちを持っている。最後に「来年もぜひ頑張りたい」44%と結んでいる。

舞台の裏方、運営をした学生によると、「よい経験をした」34%、「ひとつのことにうちこむすばらしさを感じた」26%、「やればできる」29%、「係の仕事が大変だった」52%、「係の仕事がよくできた」32%であった。そして「皆の協力で舞台が成功した」67%、「観客が多くてよか

った」66%,「来年も頑張るって欲しい」53%で、ここは出演者と同じである。作品に対しては、「感動した、美しかった、校内発表会よりずっとすばらしかった、個性的な作品だった」等であるが、仕事の関係で全員が観賞することはできなかった。

以上は1983年のレポートであるが、毎年、学生のレポートの内容はこれとほぼ同じである。

この中で、特に「人間関係」についてが多くあげられている。グループでの創作の場合、人数が多いほど、まとめるのは大変である。個々の考えが皆違う人間が集まり、意見を主張しながら連帯し創作することは、他の個性を認め、しかも、自分自身の美的経験の領域を拡大することができる。自己の限界を知り、そこから、新しい可能性を発見し、協力して解決の方法を創造していくのである。ここでは統率、協力、責任などの協調性が必要となる。踊るという運動的なつながりは、必ず互いの心のつながりを必要とするのである。

学生は最後に「いい友達ができた」と結んでいる。

創作過程で困難が多いほど、作品が完成した時の感激は大きい。学生は、全員が創造する喜びを感じている。創造の喜びを感じることは、学生の価値感を高めることである。

### テーマの分類から

学生は、テーマの選択を自己の内面、自己の周囲から求めているものが、50%で一番多い。「20歳前、青春、たびだち、めざめ」等、自己をみつめ、どうあるべきかを問い、作品を創っている。そして、自分から、だんだん周囲に目を広げ、社会全般に渡っている。花や動物等、自然界のものから、社会に起った、ニュースや流行に対しても敏感に反応し、それを受けとめている。社会的背景をもったテーマは、全体の20%にあたり、初期の頃がこの傾向が強い。

「公害」問題、「戦争」に対して学生はかなりの感心を持っているといえる。又、歴史的な背景や宗教的なものをあつかったテーマも多い。以上の様にテーマの選択は広範囲より行われている。テーマが決定すると、それについての追究をする。文献、辞典、新聞等からそのテーマを掘りさげ、その中から、何を主題とするかを決定するのである。このように学生は、テーマを決定するにあたり、社会全般に目をむけ視野を広め、さらに、ひとつのテーマを深く洞察し、自分の主題をはっきりとつかむため、知的な活動をくり返す。この経験は他の事象に対しても、観察的な態度で接し、多面的に物事を考えられるようになるのである。

### 観 賞

初めの頃、創作舞踊を初めて観る人が多く、「前衛だ」「わからない」等、色々な意見があった。作品そのものも未熟ではあったが、観客が創作舞踊の経験がなく、慣れていないこともあった。舞踊観賞は、観賞者が心を開き、作者の働きかけに対応して、自分の中に新しい創造活動を起こすことなのである。観賞力を高めるには、まず、「美」を受け入れる心の準備がなければならない。この美的な構えを人の感情によび起こす方法は、みずから美しいものを生みだす能動的な活動、すなわち、「創作すること」が最善の方法である。

学生は、Iの①の動きのスケッチの段階に入った時は、指導者が言葉で説明しても、なかなかわからない。しかし、④になると、何度か創作や、観賞を通して「作品の表現のポイントやどんな作品がいいのか」を経験し、理解できる。観賞能力は、2年生の校内発表会の観賞によ

り、さらに高まる。この時点で、観賞能力はかなりあり、1年生と2年生の差はあまりなく、校内発表会のよかった作品の順位は、ほとんど同じである。創作過程の他の作業と比べると、この観賞能力は、かなり早い時期につくと思われる。

以上の様に、舞踊創作の体験により、美的感情を育て、観賞力を高め、新たな価値の発見へと導いていくのである。

舞踊は音楽、美術、人体運動の三つが調和するひとつの総合芸術だといわれている様に、学生は舞踊の創作過程でこれらを経験したのである。又、人間を形成するための様々な事項をも同時に経験し、人間の身体と心を育ててきたのである。IIのイであげた、音楽リズムIIのわく内での具体的目標に、一応到達できたと思われるのである。

## おわりに

今後の課題は、第一に、題材の選択と題材の内容を深く追求させる方向に、学生を指導することである。なぜならば、作品のテーマの選択は、初期は①の社会的背景からが多かったが、それがだんだん減少して、②の自己の内面、自分の周囲から題材の選択が多くなってきた。さらに、1981年頃からは③の運動美や形式美を求める題材が多くなった。これは、表現したい内容のあるものから、運動美や形式美を求める抽象的な舞踊の傾向が強くなってきたのである。もちろんこの様な舞踊も美的価値判断を表現するものであるが、しかし、身心一元論に基づく舞踊教育を考える時、より積極的に舞踊とかかわるためには、①の社会的背景から及び②の自己の内面からテーマを選択する割合をふやす様な指導が必要である。そのことによって、さらに質の高い作品へと導くことが可能となる。

第二の課題は、幼児から大学生まで、一同に会し、創作舞踊の発表会を行うことであるが、そのためにの基礎は徐々にできつつあると考えられる。すなわち、11年間の上田市民会館での発表は、創作舞踊の社会への啓蒙も行われたと思われる。毎年会館はほぼ満席となり、観客は小学生から一般人と広く観賞されている。1981年より賛助出演を迎え、さらに、創作舞踊の輪も広がった。1977年より幼児教育現場でも創作舞踊の研究会を持つようになり、毎年その数が増えているので、幼児の舞踊を賛助出演に迎えらる日も近いと思われる。しかし、その課題を実現するためには、よい舞踊の指導者の育成が必要となる。そのための最善の方法は、指導者自身が創作体験を持つことである。従って、第一の課題を实践させ、質の高い創作体験をさせることである。すなわち、それは11年間の歴史を基に、創作舞踊を通しての教育を充実し、さらに発展させることであると確信する。

## 参考文献

- |            |      |      |      |
|------------|------|------|------|
| 舞踊の美学      | 邦正美  | 富山房  | 1973 |
| 舞踊創作の理論と実際 | 渡辺江津 | 明治図書 | 1974 |
| 舞踊の文化史     | 邦正美  | 岩波新書 | 1968 |

## 幼 児 教 育

幼児教育（幼児と音楽リズム） 長野県短期大学幼児教育科編 白文社 1983

芸術，スポーツと人間（人間と芸術） 永井潔 新日本出版社 1977

体育の科学（指導要領下のダンス） 水谷光 1975 7月号

世界大自然年鑑 1978～1980 平凡社

〃 1981, 1982 〃

朝日年鑑 1983 朝日新聞社